

グループワークにおける「断り表現」の実態 —社会的自己制御との関係から—

藤木 晶子 米谷 さくら
Akiko FUJIKI Sakura YONEYA

目次

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 謝辞
6. 引用文献

[Abstract]

Refusal Expressions in Group Work: Investigation of Social Self-regulation

In this study, we investigated the differences in refusal expressions between a compatible type of self-assertiveness and submissiveness that constitutes social self-regulation and a non-compatible type of lower self-assertiveness, in the context of refusing a request from others during the performance of group work. The scene of refusal was within a gaming simulation, and the participants were required to respond as the manager of the group, taking on the task of handling the entire group. In particular, we examined the case where a fictitious member made a request that would lead to a decline in the quality of output of the entire group. Compatible-type persons made indirect refusals, including expressions such as "Please refrain from..." and "It would be helpful if you..." along with expressions showing consideration for the one being refused, such as "I understand how you feel." Most non-compliant people only expressed their refusals directly. Thus, even in the case of an unreasonable request, those with both high self-assertiveness and high submissiveness express refusal with consideration for the opinions and feelings of others.

1. はじめに

今日、学校の教育現場では、アクティブ・ラーニングの一環として、グループワークが多く取り入れられている。グループワークとは、複数人で一つの目標達成を試みる作業形態の一つである。そこでは、グループ全体の発展を見据えた上で個々人が質の高い活動を行うことが求められる。そのため、グループワークを成功させるためには、各メンバーが役割分担しながらも、協力し合える体制を維持する必要がある。つまり、良好な協力体制

を保つことができれば、お互いの欠点を補ったり、長所を伸ばしたりするなどの、グループ全体にとってポジティブな相互作用を生み出すことが可能である。しかしその一方で、メンバー同士協力する体制が崩れ、非協力的な人間関係に陥った場合、そうした生産的な活動を望むことは困難になり、満足なグループワークを行うことができない事態が生じる。こうした事態を免れるためにも、良好な協力体制を維持することは、グループワーク成功のための重要な要素となる。また、グループワークを成功させるためには、この協力関

キーワード：断り表現, グループワーク, 社会的自己制御

Key words : Refusal Expression, Group Work, Social Self-regulation

係の破綻を免れる努力が必須となる。

この良好な協力体制が破綻する契機には様々なものが考えられる。そのなかでも破綻が生じやすい典型的な事象として、グループを統括するリーダーが、メンバーから理不尽な要求や要望を依頼されたときに、それに適切に対処できないケースが挙げられる。このようなメンバーからの要求・要望への対応に失敗すると、ときに、グループ活動全体の質を著しく低下させる場合がある。そのため、理不尽な依頼であっても、単純に拒否を表明するかどうかは、その後の相手との人間関係、グループ全体の協力体制を考慮し、慎重に判断すべきだと思われる。つまり、「それはできません。」「それはダメです。」といった直接的な拒否の表明は、相手の意向をすべて否定するため、相手にとっては納得のいかない、また不愉快な接し方とも受け取られる。その結果、グループ内の人間関係が損なわれ、引いてはグループ全体の活動の質の低下につながりかねない。したがって、たとえ無用で理不尽な依頼であっても、良好な人間関係を保つためには、相手に不快な思いをさせないような「断り方」が求められる。

ここで「断る」という行動について考えてみたい。「断る」とは、相手の要求に対して“その意に沿えない”という自分の気持ちを相手に伝える行動である。そもそも相手を不快にさせる要素を含む行動であるため、それと相反する良好な協力関係を維持することを念頭におくなら、単に拒否する意を伝えるだけでなく、相手に不快な思いをさせない配慮が必要となる。こうした相手の気持ちを考慮した「上手な断り方」とは、社会スキルの一つとして対人場面において重要な役割を果たしていることが指摘されている (e.g., 石川・岩永・山下・佐藤・佐藤, 2010)。では、この「上手な断り方」をする人とは、どのような社会的スキルをもち、具体的にどのような表現を用いるのだろうか。

先ほど述べたように、グループワーク全体の活動の質を低下させるような理不尽な依頼に対し、グループのリーダーとしては、グループワークの質を優先し、断りたい気持ちがあるだろう。その一方で、この「断る」という行動は、相手を不快にさせる原因になりかねない。このようなグループワーク成功のためには断るべき現状と、相手を怒らせたくないという個人の欲求の間で生じるジレンマをうまく解決する必要がある。つまり、社会的文脈を読み取った上で、それに合わせて自分の行動についても適切に調整する社会スキルが重要な役割を果たしていると思われる。

このような社会的場面で、すなわち、現状認知と個人の欲求・意思との間でズレが生じた場合に機能する社会スキルとしては、社会的自己制御 (Social Self-Regulation) が提案されている (e.g., 原田・吉澤・吉田, 2008)。社会的自己制御能力とは、自分の気持ちや行動を抑制し相手に合わせる能力と、自分の考えや意見を主張するという2つの能力から構成されており、他者との相互作用が必要な社会場面において適応的な行動をとるためには、個人の中でこれらが両立していることが極めて重要と考えられている (e.g., 伊藤・丸山・山崎, 1999; 原田・吉澤・吉田, 2008)。加えて、発達心理学的な文脈においても、この能力は、幼児期・児童期・青年期の社会的発達に欠かせない重要なものとして位置づけられている (e.g., 安達・小林, 2002; 柏木, 1988; 原田・吉澤・吉田, 2008)。

このような観点から、改めて「断り」行動について考えると、社会的自己制御を構成している自己抑制と自己主張が共に高い場合に、より適応的な「断り」行動をとることができるのではないかと推測される。なぜならば、相手の意に反する内容を伝える場合には、社会的な文脈に合わせた適切な自己主張が求められるからである。したがって、前述したようなグループワーク時に理不尽な依頼を受

けた際にも、グループ内の人間関係を損なわない「上手な断り方」をする可能性は高いだろう。一方、自己抑制と自己主張のバランスが取れていない人は、適応的な行動を取ることが難しいため、直接的な拒否を表明する可能性が考えられる。このように、社会的自己制御能力の高低が、「上手な断り方」に大きく反映される可能性が考えられる。

そこで、本研究は、大学生のグループワーク実施時に擬似的な「断り」場面をつくり、自己抑制と自己主張の両方が高い両立型の人と、自己主張と自己抑制のバランスの取れていない非両立型の人を比較し、その場面に対する断り表現にどのような相違が生じるのかを調べる。具体的には、グループのリーダーとして、同じグループメンバーと交渉しながら、個人目標と集団目標の調整、個人活動と組織全体の活動とのジレンマなどの問題に直面するゲーミング・シミュレーションを実施する。このゲーム・シミュレーション中、“他のメンバーからの予期せぬ自分勝手な要望”を受けた際、その要望に対し、社会的自己制御のバランスが取れている両立型の人とバランスの取れていない非両立型の人が、どのような「断り表現」を用いるかを検討する。

2. 方法

参加者

北星学園大学、北星学園大学短期大学部に所属し、北星ピア・サポーターとして活動する学生41名（男性14名、女性27名、平均年齢=19.63）が参加した。学科の内訳は、大学英文学科2名、心理・応用コミュニケーション学科3名、経済学科7名、経営情報学科7名、経済法学科2名、福祉計画学科4名、福祉臨床学科4名、福祉心理学科4名、短期大学部英文学科6名、生活創造学科2名であった。また、学年の内訳は、大学2年生=21名、大学3年生=10名、大学4年生=2名、短大

1年生=5名、短大2年生=3名であった。

ゲーミング・シミュレーション

1) グループ構成

ゲーム実施時のグループ構成人数は12～13名とし、そのうち、参加者は、リーダー1名、副リーダー1～2名のいずれかに割り当てられた。リーダーと副リーダーは、所属する学科が異なり、かつ上級生と下級生が混ざるように構成した。また、リーダーと副リーダーの違いは肩書のみとし、参加者は全員がグループの管理者という立場を担った。その他の10名の構成メンバーは、イベントを手伝う架空のメンバーとしてイラストで登場した。イベントを主催する担当者も架空の人物を設定した。

2) グループワークの内容

グループワークは、同じグループメンバーと交渉しながら、数ヶ月にわたって個人目標と集団目標の調整、個人活動と組織全体の活動の調整を擬似的に体験するゲーミング・シミュレーションを行った。具体的には、「全国ピア・サポーター活動報告会」という架空のイベントを設定し、そのイベントに向けて、架空の時間軸上で準備作業を行うことが求められた。イベントは、6週間後に京都で実施され、その間、他大学に向けて自らが行っているピア・サポート活動を報告するためのポスター作成などの準備、イベント主催者との連絡、構成メンバーへの仕事の付与、構成メンバーから寄せられる苦情や要望への対応すべてをこなすことが求められた。

この架空のイベント準備における実際の作業時間は3時間とし、1日の時間は現実の時間で約4分半とした。1日が経過するごとにコンピューターから合図音が鳴ることで、時間経過を把握できるようにした。架空の日時である○月○日から始まり、架空の活動報告会が開催される6週間後の○月○日に、グループごとに作成したポスターを使い、実際

に発表を行うことが事前に伝えられた。また、このポスター発表の準備は、リーダーと副リーダーがすべて行い、発表内容の考案から模造紙にその内容をまとめる作業を、現実の作業時間開始から終了の3時間以内に行うことが求められた。なお、この現実の時間軸上で行うポスター発表準備は、架空のイベント準備中に発生する様々な社会的場面に適切に対処できているほど、時間にゆとりができ、スムーズに行うことができるしくみとなっていた。

擬似的に発生する社会的場面としては、架空の活動報告会を主催する担当者との連絡、架空の構成メンバー同士の人間関係に関するトラブル相談、リーダーと副リーダーの決定に対する構成メンバーからの苦情といったものが設定された。各場面の内容は、カードに記載され、ゲーム内の毎週日曜日に渡された。参加者はカードに書かれている内容を読み、どのように対応するかを紙に書いて回答した後、発表の準備に取り組むことが求められた。架空の翌金曜日には、必ずその回答用紙を提出することが求められた。また、このカードへの回答には、予め正解・不正解が用意され、不正解の場合には、なんらかのペナルティが科された。そのため、構成メンバーとのやりとりが常に正解である場合には、現実に行うポスター制作の時間を多く割くことができ、発表準備に余裕が生まれたが、不正解が多くなるほど、ペナルティに要する時間が多くなり、その分ポスター制作の時間が少なくなり、発表準備が疎かになるしくみになっていた。

カードへの回答方法は、はじめに、各自カードを読み、その後、3分以内に紙に文章を書いて回答した。この際、回答は参加者同士で相談せずに、一人で回答することが求められた。その後、参加者全員が話し合い、管理者として適切な回答の一つ導くことが求められた。ゲームの進行には、後者の参加者全員で

相談した回答が採用された。本研究では、前者の個人回答を分析の対象にした。

3) グループワーク時の断り場面と回答

断り場面は、次のようなストーリー展開で回答が行われた。

1. ゲーム後半に、文部科学省よりリーダーと副リーダー宛に『予算に変更があったため、各団体における宿泊費を自己負担へ変更する。予算が変更になる以前に予約していた合宿所(1人あたり1,500円)は予約したままの状態であるため、宿泊費さえ払えば利用することが可能である。もしキャンセルをする場合は個人で行うように。』という連絡が入った。

2. これを受けて、リーダーと副リーダーはこのことをメンバーに伝達した。

3. リーダーと副リーダーからの連絡を受け、宿泊費が自己負担になるのであれば、自分で合宿所をキャンセルし、自分の好きなホテルに宿泊したい旨の要望を寄せるメンバーが出現した。実際のそのメンバーの発言内容は『合宿所はキャンセルして、好きなホテルに泊まってもいいですよね!?!』というものであった。

このストーリー展開の中で、参加者は管理者としてどのように対応すべきかを回答することが求められた。とくに、実際にそのメンバーに語りかけるような話し言葉による回答が求められた。

社会的自己制御尺度

原田・吉澤・吉田(2008)によって作成された社会的自己制御尺度を用いた。本尺度は、次の3つの下位尺度から構成され、全29項目からなる。1)「多数派の意見とは違っても自分の意見を言う」「たとえ言いにくいことでも、間違っていることは指摘できる」といった項目から構成された『自己主張』、2)「集団の中で、自分の決められた役割があるときには、どんな誘惑にも負けず取り組む」

「やりとおさなければならない仕事があるときには、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる」といった項目から構成された『持続的対処・根気』、3)「納得のいかないことがあったとき、すぐにかんしゃくを起こしたりせず、落ち着いて話すことができる」「嫌なことがあっても、人やものに八つ当たりをしない」といった項目から構成された『感情・欲求抑制』の3つの下位尺度であった。このうち『持続的対処・根気』と『感情・欲求抑制』の2つの尺度には、中程度の相関があり、自己抑制的側面の能力を反映する(原田・吉澤・吉田, 2008)ことが示唆されていることから、本研究では、これら2つの尺度をまとめて『自己抑制』を測定するものとした。回答は「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの5件法とした。

3. 結果

分析対象者

断り場面の回答に欠損値があった1名を省き、40名(男性13名, 女性27名, 平均年齢 = 19.63)を分析の対象とした。

社会的自己制御能力

参加者全員の社会的自己制御の下位尺度ごとの平均得点と標準偏差を表1に示す。t検定による平均値の比較を行ったところ、自己主張と自己抑制に有意な差は認められなかった($t(39) = 6.12, n.s.$)。また、F検定を行った結果、自己主張(0.48)の方が自己抑制得点(0.27)よりも分散が有意に大きかった($F(39,39) = 1.76, p < .05$)。自己主張得点については、高い人から中程度, 低い人まで均等に分布していた。その一方、自己抑制得点については、ほとんどの人が高かった。そこで、自己主張については、平均得点3.5以上の人を高群, 3.0~3.4の人を中群, 2.9以下の人を低群の3つに分け、自己抑制については、

3.3以上の人を高群, 3.2以下の人を低群の2つに分けた。各群の人数の内訳を表2に示す。このうち断り場面の表現の相違を調べる群としては、自己主張と自己抑制の両方が高い群を両立型とし、自己主張が低く、自己抑制が高い群を非両立型とし、両者の表現を比較することとした。両立型と非両立型の人における自己主張得点と自己抑制得点の平均を表3に示す。

表1. 社会的自己制御能力の下位尺度ごとの平均得点

	平均	(標準偏差)
自己主張	3.10	(0.69)
自己抑制	3.77	(0.52)

表2. 自己主張の高・中・低×自己抑制の高・低の人数

	自己抑制		
	高	低	
自己主張	高	8	2
	中	9	4
	低	12	5

表3. 両立型と非両立型における自己主張平均得点と自己抑制平均得点

	自己主張	自己抑制
両立型	4.01(0.46)	4.25(0.33)
非両立型	2.55(0.29)	3.96(0.39)

(注) 括弧内は標準偏差

断り表現

前述の群分けをもとに、両立型と非両立型の「断り表現」の比較を行った。まず、各群の断り場面における発言方法の相違を調べるため、両立型と非両立型の人において、直接的な断りを行っている返答と非直接的な断りを行っている返答をラベリングした。直接的な断りとは、「ダメです」「できません」といった表現を含み、自分の考えである拒否の意思

表4. 両立型と非両立型の断り表現に対する直接的と非直接的な断り方

No	両立型	断り方
A	北星ピアサポーターの活動として行くので、そのような行動は <u>控えてください</u> 。	非直接的
B	合宿では短い時間ではありますが、一緒に他メンバーと生活することで、普段の活動では得られないものがあると思うので合宿所に <u>泊まって下さい</u> 。	非直接的
C	この合宿は団体行動が基本です。個人がバラバラに行動すると点呼や情報を伝えるのに時間がかかりますよね。合宿では「みんなのため」を心がけて行動してもらえると <u>助かります</u> 。	非直接的
D	まず、 <u>どのような理由でキャンセルしたいのか教えてください</u> 。今回は北星のピアサポとして行くわけですから、原則集団行動となると思います。理由をきいた上で、3役と担当の先生と話し合います。	非直接的
E	問題はありません。もしそうするのであれば、集合時間に間に合う距離の場所にして下さいね。また、合宿所でみんなで泊まり、一泊ですが一緒にごはんを食べることによって、ピアサポの交流が深まるとのねらいもあるので、その事も考慮して、 <u>もう一度ご検討下さい</u> 。	非直接的
F	予算の都合で自己負担してもらうことにはなりましたが、もともとは文部科学省の方で用意して頂いた合宿所なのでキャンセルしてしまうと申し訳ないので、 <u>ダメです</u> 。前日もリハーサルや会場での動きを伝えたいので合宿所を利用しましょう！	直接的
G	合宿所はすでに主催側から割り当てられているので、泊まる所は変更できません。 <u>すみません…</u>	非直接的
H	夜おそくに京都に到着すること、朝の集合が早いことを考えて、なるべく全員一緒に行動したいです。 <u>気持ちは分かりますが</u> 、プライベートの旅行のときをお願いします。	非直接的
No	非両立型	断り方
a	合宿では、ピアサポ内の交流を深める場でもあり、一緒に寝泊まりすることに意味があります。なので、1人で違うホテルに泊まることも、1人の意見だけで他のホテルに泊まることも <u>できません</u> 。	直接的
b	<u>ダメです</u> 。1人の人が好きなホテルに泊まることを許してしまうと他の人も好きなホテルに泊まりたいと言う人がでてしまうので <u>ダメです</u> 。 また、みんなが違うホテルに泊まるとなると予算オーバーになってしまうので <u>ダメです</u> 。	直接的
c	ピアサポ全体の予算がありますので、要望を現段階で受け付けることは <u>できません</u> 。	直接的
d	集団で行動することが合宿の1つの目標でもあると思うのでよほどの理由がない限り、最後まで合宿所にて合宿に参加して <u>いただきます</u> 。	非直接的
e	<u>自分勝手なことはやめてください</u> 。それなら自費で行ってもらいます。ルールは守ってください。合宿所に泊まってください。	直接的
f	合宿所側にも迷惑がかかるので <u>あまりよいとは思えません</u> 。また、ホテル代で多くのお金がかかりさらに費用がかさんでしまうと思います。	非直接的
g	<u>ダメです</u> 。事前に決めた合宿所があり、すでに予約もしています。キャンセルするにもお金がかかります。それに別々のホテルに泊まるとみんなで行動することが <u>できません</u> 。	直接的
h	<u>だめだと思います</u> 。なぜなら、私たちは集団行動をしているので、一人がバラバラな行動をとってしまうと和が乱れてしまうと思います。	直接的
i	ピアサポ内での連絡、情報の共有、集合人数の確認、安全の面、 <u>キャンセルはせず、合宿所に泊まってください</u> ね。	非直接的
j	学校を代表して現地へ行くという心がまえをわすれてはいけません！なので、 <u>決められたホテルにとまり、きちんと目的を達成させましょう！</u> がんばりましょう！	非直接的
k	<u>ダメです！</u> 仲間内でしんぼくを深めるのもこの研修の目的の一つなので同じホテルに泊まってもらいます。	直接的
l	合宿所を利用せず、キャンセルする場合は、個人で行うことになっているので。	-

(注) 直接的な断り表現には下線を、非直接的な断り表現には波線を引いた

のみを表明している場合に、直接的断りとした。一方、「～は控えてください」「助かります」などの丁寧な断り表現や、「気持ちは分かりますが」といった相手に寄り添った表現を含み、自分の意思に加えて相手を不快にさせないような工夫がされている場合には、非直接的な断りとした。両立型の人と非両立型の人において、直接的な断り・非直接的な断りを判定した結果を表4に示す。また、両立型の人と非両立型の人の中で、直接的な断りをした人の人数、非直接的な断りをした人の人数を表5に示す。 χ^2 乗検定にて分析した結果、両群の人数比率の差は有意であった($\chi^2(1) = 4.97, p < .05$)。両立型の方は、非直接的な断りが有意に多く、非両立型の方は直接的な断りが有意に多かった。

表5. 両立型と非両立型ごとの断り方 (人)

	断り方		
	直接的	非直接的	
社会的自己制御	両立型	1(12.5)	7(87.5)
	非両立型	7(63.6)	4(36.4)

(注)括弧内の数値は両立型・非両立型ごとの%

4. 考察

本研究は、グループワーク活動時に同じグループ・メンバーから理不尽な依頼を受ける場面において、社会的自己制御を構成する自己主張と自己抑制がともに高い両立型の人と自己主張のみが低い非両立型の人とで、それぞれどのような断り方をするのか調べた。

断り場面は、数ヶ月にわたるグループワークを擬似的に体験するゲーミング・シミュレーション中に組み込まれた。参加者はグループの管理者としての役割を与えられ、グループ全体を取り仕切ることが求められた。

その結果、こうした状況下にて、グループ全体の質低下を招くような依頼がメンバーから寄せられ、それに対して拒否を表明する必

要がある場合、自己主張と自己抑制の両方が高い両立型の方は、自身の意見を直接的に伝えるのではなく、相手への配慮や気遣いを含むような非直接的な断り方をすることが分かった。つまり、「断る」という相手の意思に沿わない自分の意思を表明しながらも、相手を不快にさせないような工夫を加えていた。さらに、両立型の方の非直接的な断り方を詳しく見ていくと、もっとも多かったのは、「控えて下さい」「～して下さい」「～と助かります」といった丁寧な表現であった。これは、礼儀正しい姿勢を示すことで、相手に敬意を払っていることを表明していると思われる。また、「すみません」と相手に許してもらいような表現もあり、自らが謙ることで相手を敬う気持ちを表明していることが分かる。さらに、「気持ちは分かりますが、…」という相手の意向に理解を示すような表現もあり、どのような理不尽な依頼であっても相手の気持ちには寄り添う姿勢を示していることが分かる。さいごに、「理由を教えてください。」「もう一度ご検討下さい。」といった相手に再考させるような表現もあった。これは、自分と相手の意見に相違があることを遠回しに示した上で、相手の気持ちを落ち着かせる猶予を与える工夫をしていると思われる。これらの表現において一貫して言えることは、自らの主張したいことを直接的に伝えないことで、「断り」に付随する不快な気持ちを少しでも低減させる工夫がなされていることである。したがって、両立型の方が備えている社会スキルとは、現在の社会的文脈を適切に読み取った上で、自らが掲げる目標を達成するためだけではなく、相手の意見や気持ちに合わせてその行動を調整する能力が備わっていると考えられる。また、今回の断り表現には、相手を敬うような表現が多く使われていたことから、断り行動を取った後に続くであろう、相手との人間関係を適切に展望するスキルも備わっていることが推測される。

一方、今回得られた両立型の人「断り表現」のうち、どの表現がもっとも不快な気持ちを誘発させないのかという点については、本研究からは不明である。今後、両立型の人が行う「上手な断り方」の妥当性の検討も必要だと思われる。おそらく、返答を受け取る相手の性格や社会スキルによっても感じ方は異なるため、正解は一通りではないことが予想される。どのような相手にどのような「断り方」がもっとも効果的であるかという問題については、今後検討の余地があるだろう。

次に、自己主張が低く、自己抑制が高い非両立型の人については、両立型の人が行ったような相手への配慮や気遣いをする事なく、自分の意見を一方的に表明するような直接的な表現を用いている人が多いことが分かった。本研究で取り上げた非両立型の人が高い自己抑制能力を備えていたことに注目すると、社会的文脈に合わせて自らの気持ちや行動を抑制する能力は備わっていると思われる。そのため、自ら主張する場面がないような、常に受け身の姿勢で活動できる状況であれば、上手くグループワークをこなすのかもしれない。しかしながら、本研究で求めた役割は、管理者の立場としてグループ全体の活動を管理し、将来にわたってその活動の質を維持することが求められるものであった。こうした管理者の立場からメンバーと接する際には、常に受け身の姿勢ではいられず、何らかの主体的な姿勢が必須となる。とくに、本研究で取り上げたような理不尽な要求に対する「断り」場面では、管理者の立場として、相手の意に反する内容を的確に伝える対応が求められた。こうした社会的文脈を考慮した主体的な行動を見た場合、本研究の断り場面では、「断り」に付随する相手の不快な気持ちを察知し、適切に低減する工夫をする必要があったが、自己主張が低い非両立型の人において、こうした相手の気持ちに寄り添う表現は少なかった。このことは、「上手な断り」

に自己主張能力が重要な役割を果たしていると思われる。これとともに、自己主張能力に含まれる行動の制御がうまく機能していなかった可能性が考えられる。

原田・吉澤・吉田(2008)は、社会的自己制御尺度を構成する自己主張が行動抑制と関連していることを示唆している。行動抑制とは、注意制御に必要なエフォート・コントロール(e.g., Robert, Derryberry, & Posner, 1994)を構成する能力の一つとして提案され、「興奮してアイデアを表現したい時でも、順番を外れてしゃべることは簡単に我慢できる」といった行動をコントロールする能力(Rothbart, Ahadi, & Evans, 2000; 山形・高橋・繁耕・大野・木島, 2005)としている。原田・吉澤・吉田(2008)は、この行動抑制と自己主張能力の関連を調べた結果、中程度の相関を見出している。したがって、社会的自己制御能力の自己主張には、自分の欲求や意思を明確に表明するだけでなく、集団や他者との関係を損なわないように自身の行動を抑制する側面が含まれている。これらのことを総合すると、「Yes」と回答してもらいたい相手の気持ちとグループ全体の質を考えて「NO」と主張すべきような、双方にズレがあるときに、自己主張能力が低い人は、相手の気持ちを適切に察することができずに、自分の主張である「NO」という主張を直接的に伝えたと思われる。したがって、「上手な断り方」をするためには、相手の気持ちに合わせて自身の主張のし方を適切に調整する能力が非常に重要な役割を果たしていると考えられる。

このように、相手の気持ちに配慮した「断り方」とは、社会的文脈を適切に読み取る能力が重要な役割を果たしていることが分かった。とくに、自己主張の高低によって、「断り方」の違いが明らかとなったことから、自己主張能力が担う役割は大きいと思われる。しかし、本研究では、自己抑制の高い人のみ

を分析の対象としており、自己抑制の低い人の「断り方」について検討がされていない。本研究で収集した大学生には、自己抑制の低い人の数が少なく、妥当性が保証できないために分析の対象から除外したが、自己抑制能力が「断り」行動にどのような役割を果たしているのかは、改めて、自己抑制の高い人と低い人を比較する必要があるだろう。また、本研究では、自己主張と自己抑制が共に低い非両立型についても、分析から除外した。両立型と比較し、両方のスキルが低い人において、どのように異なる断り方をするのかについても、さらに検討する必要がある。

さいごに、本研究で用いたグループワークとは、十数人の有志が集い、「全国ピアサポーター活動報告会」に向けて準備するような活動形態であった。これは、大学生が行う利益を追求しない小規模なグループワークとも捉えることができ、この状況が、本研究において分析対象とした「断り表現」に大きく影響していた可能性は十分考えられる。つまり、同じ大学生でも、メンバーの構成員が多く、部門が形成されるような組織的な活動、利益を追求するような活動は、本研究で取り上げたグループワークと質が異なるため、適切な「断り表現」についても異なる可能性が考えられる。したがって、本研究の成果がどの範囲まで汎用可能であるかは、グループワークの活動形態を変えて、さらに検討を重ねる必要があるだろう。

謝辞

本稿の作成にあたり、調査の準備、実施等にご助力頂いた中嶋輝明氏、佐藤淳哉氏、後藤成美氏、小林珠江氏に深謝する。

引用文献

安達喜美子・小林 晃 (2002). 現代青年における自己制御機能の発達の研究 (1): 自己認知からの検討 茨城大学教育学部紀要 (人文・社

会科学, 芸術), 51, 109-23.

石川信一・岩永三智子・山下文大・佐藤寛・佐藤正二 (2010). 社会的スキル訓練による児童の抑うつ症状への長期的効果 教育心理学研究, 58, 372-384.

原田矢佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成: 妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究, 17, 82-94.

伊藤順子・丸山 (山本) 愛子・山崎 晃 (1999). 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連 教育心理学研究, 47, 160-169.

柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会

Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., & Evans, D. E. (2000). Temperament and personality: Origins and outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 122-135.

Rothbart, M. K., Derryberry, D. & Posner, M. I. (1994). A psychobiological approach to the development of temperament. In J. E. Bates, & T. D. Wachs (Eds.), *Temperament: Individual differences at the interface of biology and behavior*. Washington DC: American Psychological Association. pp. 83-116.

山形伸二・高橋雄介・繁榊算男・大野 裕・木島伸彦 (2005). 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 14, 30-41.